

米作りからごはんを愛する
長崎県立長崎東中学校 二年 松田つくし
家から獣道を少し歩くと、そこには美しい
田園風景が広がっている。トラックが道路を
行くとくもの巣に引っかけらなくて済むのだ
が、いつもその道を走って田へ向かう。
先祖代々引き継がれてきた松田家の田。田
植えの時期になると、姉妹といとこの六人で
仕事をしに行く。半そで半ズボンで帽子をか
ぶって田に行き、長靴に履き替えて田植えを
始める。黒いかごに入った稲の苗をてのひら
の分だけもぎ取って、水を張ったゆるい土の
中へ足を運ぶ。うちの田は一般的な田と比べ
るとかなり水分を含んでいるので注意が必要
だ。田に入ると、指を、鉛筆を持つときによ
うなかたちにして、端のほうから十五センチ
メートルの間隔で苗を植えていく。みんな
協力して一段終わるとまた一段、正午の鐘が
鳴るまで田植えをしていく。そのころにはみ
んなお腹がぱっこぱっこだ。

田はかなりの高低差がある斜面にあり、石垣が積まれて棚田になっている。一番下の田の隣に大きい川が流れていて、私たちはいつもその川の隣で、まだ田植えが途中の棚田を見ながら昼食を食ハる。中身はもちろんおにぎりだ。朝から米を十合炊き、みんなでまん丸いおにぎりを三十個作る。我が家では、おにぎりの具は鮭や昆布、梅干しが人気だ。それをホカホカの白米で握り、ラップで包んで持っていく。

疲れていても、おいしいごはんを食ハるとなんだか元気が湧いてくる。視覚では棚田の風景を、聴覚では川のせせらぎを、味覚と嗅覚と触覚ではおにぎりをほおばってひと粒ひと粒の味を堪能することができる。このおいしさを手に入れるために、祖父母や父は田植えを続けているのだと感じた。

米作りはとて大変だ。苗を植えても、農薬散布や害獣の侵入を防ぐ対策をしなければならぬ。昨年はイノシシが出没し、甚大な

被害を受けた。台風の影響を考慮する必要もある。トラクターは費用がかさみ、危険なこともある。だから、私はなぜそこまで米作りにこだわらのか疑問を持つたことがある。店で買ったほうが安く、きつい農作業をする必要もないと考えたからだ。だが、その疑問は米作りをしなければならなかった。店の米よりもうちの米のほうがおいしかつたのだ。炊きたての食欲をそそるあの匂い、口に含むとほのかなあまみがいっぱいに広がる、何杯

でも食べられる。もちろん売ってある米もおいしいが、それ以上においしく感じられるのは、みんなで作った思い出ごとごはんを食べることでできるからだと思う。

昼食を済ませると、残りの作業に取りかかる。父はトラクターに乗って作業をし、他の人は午前の続きをする。冷たい麦茶を飲んで、せせと田植えをするのはとても楽しい。そして、まだその日の仕事が終わらないうちに、日が暮れるまでメガカヤタニシを捕ったり、

川に入ったりして遊ぶのも楽しい。
稲刈りの時期にもおにぎりを持って田に走
る。小屋から田を見下ろすと、巨大な黄金の
い⁴うたんが風でながびいているように見える。
それを、マムシに気を付けながら鎌でひとつ
ずつ刈り取る。刈り取った稲は束にして、端
に並べて置いておく。これを組んだ木にかぶ
せて干す。稲刈りの作業中には、カヤネズミ
を捕まえたり、赤とんぼを指に止まらせたり
してたくさん遊ぶことができる。干した稲を
倉に運んで脱穀すると、ようやく白米ができ
あがる。

近年、米の生産量が減少していると聞く。
そのため、スマート農業はこれからもっと進
んでいくと思う。しかし私は、爪に土が入り
込み、額の汗をぬぐうと泥がつくような農業
も守りたい。ごはんを米作りから愛して、松
田家の田を守っていきたい。